

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成29年度活動報告書

平成 29 年度 活動報告書

目 次

はじめに	2
教員・スタッフ紹介・平成 29 年度活動概要	3
平成 29 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」	
1. 第 1 回 ティーチング・アーティストという仕事について	4
2. 第 2 回 Borderless ～音楽とダンスをボーダレスにしてみる	6
3. 第 3 回 鍵ハモの魅力再発見&即興演奏のヒント	8
4. 第 4 回 音楽とコミュニケーション・デザイン	10
5. 第 5 回 ワークショップと学習論	12
6. 第 6 回 文化施設の新たな挑戦～三重県総合文化センターが取り組むアート教育	14
7. 第 7 回 神戸女学院大学 実習報告会	16
8. 第 8 回 東京音楽大学 実習報告会	17
9. 第 9 回 インタラクティブ・コンサートのアイデア発表 および 総括	19
各大学実習報告	
1. 東京音楽大学「第 7 回みないけキッズアーティスト『ワンダーアンサンブル』」	20
2. 東京音楽大学「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに 「おんがくづくりワークショップ～イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう～」	21
3. 神戸女学院大学「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 8 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」	24
おわりに	28

はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション 音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も9年目となりました。

今年度の2大学共通講座では、ワークショップやインタラクティブ・コンサートの分野でさまざまな立場から先頭に立って活躍されている講師を迎えて、先進的な取り組み内容について具体的なご指導をいただきました。本プロジェクト最初期の卒業生（昭和音楽大学）が今年度の講師の一人として第6回の指導にあたったこと、またその他にも、講座を受講した卒業生がワークショップ・リーダーとして各地で活動していることは、本プロジェクトによる人材育成が順調に進んでいることの証として嬉しく感じております。

今年度はまた、昨年度に引き続いてギルドホール音楽演劇学校大学院リーダーシップ・コースの修了生2名を招き、東京と神戸でそれぞれ音楽ワークショップ・リーダーのための特別セミナーを開催しました。特別セミナーに関して学外や卒業生からの問い合わせが多いことから考えても、本プロジェクトは益々柔軟な思考の下に社会の要請に応えるものであり続けたいと、心引き締まる思いでおります。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。この1年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧いただき、未来に向けてのご助言をいただけましたらありがたく存じます。

2018（平成30）年3月

武石みどり（東京音楽大学 教授）

*開講科目名

ミュージック・コミュニケーション講座A・B（東京音楽大学）

ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

教員・スタッフ（平成30年3月現在）

東京音楽大学	武石 みどり 磯野 恵美 坂本 夏樹	東京音楽大学音楽学部	教授 連携センタースタッフ 連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実 永吉 りう子 朝山 加奈子 遠藤 紀子	神戸女学院大学音楽学部	教授 連携ルームスタッフ 連携ルームスタッフ 連携ルームスタッフ

平成29年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、2大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成29年4月21日（金）	発信校：東京音楽大学
第1回：平成29年5月12日（金）	発信校：東京音楽大学
第2回：平成29年6月2日（金）	発信校：神戸女学院大学
第3回：平成29年6月23日（金）	発信校：東京音楽大学
第4回：平成29年6月30日（金）	発信校：神戸女学院大学
第5回：平成29年7月14日（金）	発信校：東京音楽大学
第6回：平成29年10月13日（金）	発信校：神戸女学院大学
第7回：平成29年12月1日（金）	発信校：神戸女学院大学
第8回：平成29年12月8日（金）	発信校：東京音楽大学
第9回：平成29年12月15日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

平成29年7月25日（火）於：区民ひろば南池袋
音楽ワークショップ「第7回みなないけキッズアーティスト『ワンダーアンサンブル』」

平成29年10月6日（金）～10月9日（月祝）於：東京音楽大学 A地下100教室
「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに
「おんがくづくりワークショップ～イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくらう～」

平成29年10月10日（火）～14日（土）於：神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに第8回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 29 年度 第 1 回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 1 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ティーチング・アーティストという仕事について」
講師	久保田 慶一（音楽学者・国立音楽大学教授 副学長）
実施日時	2017 年 5 月 12 日（金） 14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
講座の概要	<p>久保田先生は、ジュリアード音楽院でティーチング・アーティスト養成にあたったエリック・ブース氏の著書『ティーチング・アーティスト：音楽の世界に導く職業』（水曜社、2016）を翻訳して紹介し、また国立音楽大学で大学院生を対象にその実践を指導され、実際に近隣の小中学校への演奏派遣のシステムを構築されている。</p> <p>ティーチング・アーティストという語が音大生の中にはまだ浸透していないため、講義ではその考え方と実践方法について解説し、映像によって国立音大の大学院生の実践例を紹介した。中学校の体育館で整列して鑑賞に参加し始めた生徒たちの表情が最初は硬く緊張していたが、出演者のトークや音楽に触れ、体験を伴う参加をするうちに次第にほぐれ、楽しく音楽を受けとめている様子が見られた。</p> <p>こうしたインタラクティブ（双方向型／参加型）・コンサートを実現するために、①出演者が演奏曲目についてさまざまな側面から考え、語り合うこと、②参加者が音楽を体感できるようにするための多様なアイデアを実践してみて、「どう受けとめられるか」という観点からも考えられるようになること、③演奏の場を提供する訪問先担当者の理解と協力を得るために、自分たちがしようとしていることの特徴と意義について有効に語るができること、等の重要性が強調された。また、大学の近隣地域に大学院生や卒業生を派遣するにあたって、上記のような内容的指導は教員がするにしても、地域との関係づくりや事務的連絡については大学事務局の協力がなければ難しい。演奏課から独立した組織を立ち上げた国立音大の事例は、他の音楽大学にとっても参考になるであろう。</p> <p>映像資料が多かったために中継に不具合が生じた点は残念であった。今後は万全を期したい。</p>

〈学生のことば〉

・これから音楽家として活躍していくためには演奏の技術を磨いていくだけでなく、人の前で話す力や、教える力や、自分を売り込む力など沢山のスキルを求められることがわかった。大学生のうちに、小さなことから広く様々なことを学び、色々な視点から物事を考えられるようになりたいと思った。そうすることで一部の人だけでなく幅広い人々に音楽を伝えていけるのだなと思った。

（東京 / 声楽 / 1 年）

・ティーチング・アーティストがどのような仕事か

をよく知らなかったのですが、先生がお話されていた企画書のことなども含め、大変な仕事をしているのだと思いました。音楽をあまり知らない、あまり興味のない人に音楽を楽しんでもらうには、いろいろ考えないとうまくいくものではないとも思います。ティーチング・アーティストのやり方も様々で、どれも生徒の参加の仕方に工夫がされていて、また扱う曲も全く聴いたことがないというものではなく、どこかで一度は聴いたことがあるような曲を使って楽しめるように作られていますと感じました。エントリーポイントの重要さもよく分かりました。（東京 / 声楽 / 2 年）

・ティーチング・アーティスト (TA) という言葉を知らなかったのですが、演奏家がただ演奏をするだけではなく、演奏 (音楽) を通して、人も教育することを仕事としていると知り、今後、音楽が世界に幅広く広がっていくために重要になってくる仕事、人達だと思いました。また、音楽を将来キャリアとして捉えるためには、もちろん技術的なスキルも必要だが、やはり付加的スキルも伴わなければいけないと改めて感じました。講義を受けて、音楽を演奏する、聴くだけではなく、様々な方法で楽しく人々に関われるものが音楽だと思いました。(東京 / ピアノ / 2年)

・小中学校や福祉施設など、音楽に興味がある人ない人が入り混じっている場所でエンゲイジメント・ワークショップをする際は、今まで自分がずっとやってきた「一方的に音楽を聞かせる」という経験ではまかないきれないスキルが必要なのだとわかった。興味をもって参加し、体験してもらうためにどのように準備をするのか、実際に何をするか、いろいろと考えなくてはいけないのだと知り、「付加的スキル」の必要性を実感した。また、将来社会で活躍できるためのスキルを授業で身につけられるのは素晴らしいと感じた。

(東京 / ピアノ / 3年)

・学生さんの中学生へのビデオをみて、最初は表情がよく分からなかった中学生と一緒に音楽を共有することによって、自然と笑顔がこぼれ、楽しそうにする様子が見られて、やはり音楽はすごい力を持っているんだなと思いました。その音楽の力

を伝えることができるアウトリーチはとてやりがいがあることなのだと思います。私は高校の時にこういう経験をしたことがありますが、なかなか難しかったので、この授業を受けてからしたかったなと思いました。今後そういう機会があれば、今日の経験を活かしたいと思いました。

(神戸 / ピアノ / 2年)

・ティーチング・アーティストという仕事を初めて知ったのですが、とても難しそうな仕事だと感じました。音楽を好きな人に限らず、嫌いな人にも届け、更に好きになってもらうには、ただ自分が好きなことを伝えようとするだけでは絶対に届かないと思うからです。様々な人に音楽を伝えるには、色んな方法を考えないといけないなと思いました。(神戸 / 声楽 / 1年)

・「ティーチング・アーティスト」の「音楽を教えるだけでなく、音楽を通して人を教育する人」という定義が、今回の話を聞いてすごく納得したし、すばらしい仕事だと思いました。これからの音楽家は、演奏 + 追加のスキルが必要とおっしゃった言葉が心に残りました。私も、音楽をする人々と聴いている人たちが、対等な関係でつながれるような関わりが音楽でできたらと思います。また、エントリーポイントの話で、ストーリーを話して、「自分ならどうするか」を考えてもらうという発想に感激しました。自分がもし生徒なら、すごく楽しい授業だったと、心に残ると思います。

(神戸 / 声楽 / 3年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 29 年度 第 2 回 「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 2 回ミュージック・コミュニケーション講座 「Borderless ～音楽とダンスをボーダレスにしてみる」
講 師	砂連尾 理（ダンサー・振付家・神戸女学院大学音楽学部舞踊専攻講師）
実施日時	2017 年 6 月 2 日（金） 14:00 ～ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第 2 回の講座は、ダンサーで振付家の砂連尾理氏を講師に迎えて、神戸女学院大学から発信した。今回で 3 度目の登壇となる砂連尾氏は、毎回楽しいパフォーマンスで学生たちに体を使って考えさせる人気の講師で、本年も舞踊専攻 4 回生 2 名のサポートを得て行われた。</p> <p>まず、「体を動かすことによって、普段とは違う感受性を目覚めさせよう」と軽いストレッチから入った。2 人一組となり、1 人が頭の後ろで腕を組み、もう 1 人がその腕を引いたり、床に座って前屈したりした。音楽専攻の学生たちにとって、普段使わない筋肉を伸ばしたので、口々に悲鳴を上げていた。</p> <p>次に、現代音楽家スティーヴ・ライヒの、2 人または 10 人の男性が 6 拍子で手拍子するクラッピング・ミュージックの映像を観た。最小単位で徐々にリズムを変化させていくミニマル・ミュージックを 10 人でクラッピングするのは、流石に初心者には無理があったので、2 人の男性の映像を真似て、「なんちゃってスティーヴ・ライヒ」と銘打ったワークを行った。6 人一組で東京音大と神戸女学院がお互いミュートにして練習し、比較し合った。</p> <p>その後、2 人の女性がダンスをしている映像を観た。静かな教会の地下室と思われる、太く丸い柱がたくさん立っているところで、クラッピング・ミュージックの響きだけで 2 人の女性が同じ方向を向き、ダンスしている。一筋の光が差し込む幻想的な空間と正確に刻まれるステップに、両学の学生たちから歓声が上がった。このダンスを「なんちゃってローザス」（ローザスとはベルギーを代表するコンテンポラリー・ダンスのカンパニー）と砂連尾氏が銘打ち、お互いに実演して発表した。縦 1 列に 6 人が並び、6 拍子のクラッピング・ミュージックに合わせて先頭の 1 人がポーズをとり、次の人が別のポーズを取っている間に最後尾へ走って戻り、また順番が回ってくるとポーズをとるという動作を繰り返した。恥ずかしい気持ちと、即興的にどんなポーズをとればいいのか迷っていた学生たちも、繰り返すうちにだんだんと大胆なポーズをとれるようになっていった。東京音大のクラッピングで神戸女学院がダンスをし、またその逆をするという試みもあり、遠隔通信によるわずかな時差があったものの、インターネット・ビデオ会議システムならではの見事な連携を実現した。</p> <p>最後に、両学で講座の感想を共有し、「音楽とダンスの融合の素晴らしさを改めて実感して、遠く離れた仲間と同じ時間を共有できて楽しかった」と学生が感想を述べた。音楽とダンスを用いてコミュニケーションをとる可能性を、また身体を自由に動かすことで柔軟な表現力を学ぶことのできる講義であった。</p>

〈学生のことば〉

・今回は、思っていた以上に体を動かしました。普段なかなか身体を動かす機会がないので、少し動

いただけで結構大変でした。東京音大の方と一緒に動いたり、お互いを見合ったりして、インターネットで繋がって授業をしているおもしろさを実

感しました。 (神戸 / 声楽 / 1年)

- ・ 久々に楽しく体を動かすことができました。クラッピングは聞いている分には簡単そうだと思いますが、実際にやってみると他人につられてしまい大変でした。ですが、東京音大の方々のクラッピングで私たちがポーズをしたり、逆に自分たちのクラッピングで東京音大の方が動いたりというのが、一体感があっておもしろかったです。舞踊の人たちが考えてくれた動きも楽しかったです。

(神戸 / 声楽 / 3年)

- ・ はじめてクラッピングをしてみて、即興でほとんど打ち合わせなしにリズムを変えてたいて、色んなリズムがあるけれど、みんな拍はちゃんと揃っていたのが(自分も一員でしたが)やってみてかっこいいと思いました! それと、一列になって一人一人ポーズをとっていくのも「コンテンポラリーはかっこいいな」と昔から思っていたので、少しコンテンポラリーに触れることができ、うれしかったです。

(神戸 / ピアノ / 3年)

- ・ 何かを「演奏」するということが、今まで私は、出来上がっている楽譜に忠実に、また自分から発信

するだけの一方通行の演奏経験しかしてこなかったので、今回(ある程度の形ではあるものの)即興で、手のみ使い、拍子を音楽として聴かせるのはとても新鮮だった。さらに、それに合わせて体を動かす、しかも直前まで、どのような動きをするべきかわからないダンスは、とてもおもしろかった。

(東京 / ピアノ / 3年)

- ・ 画面を通してだったのですが、音楽とリズムをしっかりと共有できているのを実感できて、楽しかったです。リズムを変えたり、ずらしたりすることは難しかったのですが、創作中にグループでコミュニケーションも取ることができて、改めて音楽は人と人を繋げるなど感じました。身体全体も使えて、より空間を楽しむことができました。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・ リズムに合わせて体を動かすことができ楽しかった。1列になって前の人にかぶらずポーズを取るワークでは、テンポをしっかりとキープしたり、ポーズを考えたり、たくさん神経を使いました。遠く離れた神戸の人達と同じ時間を過ごすことができうれしかったです。

(東京 / ピアノ / 2年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 29 年度 第 3 回 「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 3 回ミュージック・コミュニケーション講座 「鍵盤ハモの魅力再発見&即興演奏のヒント」
講師	野村 誠 (作曲家)
実施日時	2017 年 6 月 23 日 (金) 14:10 ~ 15:30
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
講座の概要	<p>音楽ワークショップ等の場で多様な役割を果たす楽器《鍵盤ハーモニカ》の奏法や魅力を紹介すると同時に、即興で演奏すること、さらにはグループで即興を行うことを体験的に学ぶ講義であった。</p> <p>まずは鍵盤ハーモニカの奏法を紹介する巧みなトークと音色で学生達の心を惹きつけ、小学校の授業で用いる教育楽器とは異なる側面が強調された。鍵盤ハーモニカについては、「言われたことを決められたように奏するための教育楽器」というイメージが強く、芸術的表現に用いる楽器として捉えられていないためか、東京音大では小学校時代の楽器をすでに廃棄した学生も多かった。鍵盤ハーモニカを当日持参している学生の人数が少ないため、他の小物楽器も動員して即興的合奏に入る。ここで「即興は難しいもの」という先入観が強かった学生たちは、再び目からウロコの体験をすることになる。何かひとつの条件を与え、その条件下で各自が自由に演奏し、その集合体が音楽となることを体験し、そこには正解も不正解もないこと、互いにその人のやり方を認め合うことで全体ができあがっていること、それが社会と結びついていることが、講座のさまざまな場面や瞬間で体得された。</p> <p>野村先生の講義をとおしておそらく多くの学生が感じたことは、音楽の楽しさをいつの間にか忘れていたが、どうしてこれまで音楽をこれほど窮屈に感じていたのだろうかという疑問であろう。これは、従来型の音楽教育に対する大きな問題提起である。さらに学生たちは、卒業後に社会に出た時に、これまでのように固定的な音楽観に囚われているままでは、多くの人を楽しませ包み込む音楽指導者たりえないという問題意識をも抱いたに違いない。音大教育では専攻楽器を極めることに重点が置かれがちであるが、簡易なものを含めて多様な楽器に親しみ、さまざまな音楽を受けとめる包容力をもち、また音楽をとおして人を見、さらには社会を見通す力を養うことの重要性を再認識する機会となった。</p>

〈学生のこぼ〉

・今まで、作曲の経験はあっても、即興演奏はしたことがなかったし、いきなり「即興演奏をして」と言われたら、できないと思う。なので、先生がピアノで演奏して下さった時は、本当に感激した。考えながら、というより楽しんで自然に手が動いている様子に見えた。また、小学校以来、縁がなかった鍵盤ハーモニカの様々な使用方法もとてもおもしろかった。 (東京 / ピアノ / 3年)

- ・ピアノは小学生以来で、様々な奏法がとても新鮮でした。ピアノのみ、あるいは他の楽器との足し算引き算の偶然性はおもしろく、正解がないのもうれしい。目の前に先生がいらっしゃって直に伝わるものがあった。 (東京 / ピアノ / 3年)
- ・とても楽しい講座でした。音楽で遊んでいるような感覚で、みんなで即興音楽を作ることができ、わくわくしました。1台のピアノをみんなで弾いたときは、普段は聴くことがない音の数で異空間

に行った気分になって、おもしろかったです。先生の鍵盤ハーモニカの演奏に驚きました。鍵盤ハーモニカにもいろいろな奏法があって、とても楽しい楽器だと知ることができてよかったです。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・ 普段、即興演奏をなかなかやらないので、とても新鮮でおもしろかった。即興演奏ではどう弾いて良いかわからなくなるが、“縛り”を作ることでもリズムにこだわられたり、やりやすくなると思った。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・ 鍵盤ハーモニカにはあんなにもたくさんの奏法があり、音色があり、人を楽しませることができるとも思っていなかったのととても驚き、感動しました。即興は、いろいろなリズムやメロディーを合わせて一体感を生む力があることがすばらしいと思いました。

(東京 / ピアノ / 2年)

- ・ 先生が即興でピアノを演奏して下さり、私は即興演奏を初めて聴いたので、すごく感動しました。その場その場で思いついたものを演奏するとおっしゃっていたので、訓練が必要になってくるのだなと思いました。先生のかげ声のテンポの速さによってみんなの刻むテンポが変わるため、“せーの”と1234で違った音楽が出来てくるのだなと思いました。そのため、前に立つ人のはじめのかげ声は重要なのだと思いました。

(神戸 / 声楽 / 1年)

- ・ 即興で演奏することは難しい。どうやればいいのか全く分からなかったが、先生の様子を見て気楽な気持ちで自由に演奏すればよいのだと分かっ

た。また、鍵盤ハーモニカでの演奏を見て、新しい奏法を知った。家に帰ってから先生の奏法を真似て練習してみたら(すぐには)うまくできなかった。

(神戸 / ピアノ / 1年)

- ・ 即興演奏に対しての苦手意識が少なくなった講座でした。ピアノの限られた範囲の鍵盤を使って曲を使ったり、鍵盤ハーモニカを、正式な奏法で音を出すだけでなく、色々なところを使って音をだしたり、音を作ったり、音楽はどんな音でも音楽になるのだなと思い、曲はそうやって作られているのだなと思いました。

(神戸 / ピアノ / 1年)

- ・ 即興演奏に対して「難しそう」「私にはできない」と思っていたのですが、野村先生のお話を聴いて私にもできるかと思いました。鍵ハモは私の小学生の頃はハーモニカだったので、今回初めて弟のものを吹きました。鍵ハモにあんなに沢山の演奏方法があるなんて驚きました。

(神戸 / 声楽 / 1年)

- ・ 即興演奏は1234を全員ですると個々の音が見えてこないのが、ソロになると聴こえるのがすごくよかったです。また楽器が東京音大と女学院で違うので曲の雰囲気が違っているのもよいなと思いました。子どもたちが1234で作ったメロディーでオケの曲が出来たという話も頭に残りました。東京音大でしていたピアノの1234もやってみたいです。鍵ハモイントロダクション(1番初めの曲)は、ただただ難しかったし聴いていておもしろかったです。鍵ハモの即興は時差がある分大変そうでしたが、すごくおもしろくなっていました。鍵ハモ=子ども向けという考え方を今回の講義で改めさせられました。

(神戸 / 声楽 / 3年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

平成 29 年度 第 4 回 「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 4 回ミュージック・コミュニケーション講座 「音楽とコミュニケーション・デザイン」
講師	壬生 千恵子 (エリザベト音楽大学准教授)
実施日時	2017 年 6 月 30 日 (金) 14:00 ~ 15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第 4 回の講座は、アート・マネジメントの現場で精力的に活動されているエリザベト音楽大学准教授の壬生千恵子氏を講師に迎えて、神戸女学院大学から発信した。</p> <p>まず、「コミュニケーション」とは何かの説明された。情報・感情の共有であるコミュニケーションは、音楽を通して人と人が繋がり、さらには自己との対話ができるという一面を持っており、アート・マネジメントにおいても重要な役割を持っていると語られた。</p> <p>次に、エリザベト音楽大学の音楽コミュニケーション・デザイン専修について話された。アート・マネジメントと心理学の二つの柱からできているこの専修で、学生とともに、壬生氏はコンサートの企画・準備を行っている。コンサートを行うにあたり、振り返りが一番大事な作業であるため、心理調査ができるようなアンケートを作成し、満足度を統計により数値化していると説明された。</p> <p>その後、現代社会における音楽が論じられた。今日、社会から音楽へのアプローチが多様化しており、音楽のニーズとコミュニティも多様化していると考えられる。そのため、様々な場に適応するスキルを身につけ、音楽を社会に伝える力を養う必要がある。実際、音楽家をコアとして様々な職種が隣接し、仕事と音楽活動を両立する人が増えている。異分野の人との関わりの中で新しいアイデアが生まれることがあるため、正しい知識・情報を得る力を学生の間に養うことが肝要である。</p> <p>現在の音楽環境の例として、アメリカのアート・フェスティバル「バーニング・マン」が取り上げられた。これは参加者全員がアーティストになれる成功事例として知られており、音楽に関わる全ての人が「音楽する」行為の主体である「Musicking」という概念を基に行われており、アウトリーチにも通じる概念である。</p> <p>次に、3つの現代アートの作品を見せて、受講生に音楽芸術の価値について考えさせた。「何円ならこの絵を買いますか?」と問い掛けられて、学生たちは迷いながら様々な値段を挙げた。芸術に値段や価値をつけることの難しさを実感させるプロセスであった。壬生氏は、活動の担い手が価値をつくっていくのだと語った。</p> <p>学生と地域の人たちで作ったコンサートの例も紹介された。「県民とおもしろいものを作ろう」というコンセプトの基、県と大学が連携しながら企画し、地元のアーティストや子どもたちも参加するコンサートとなった。コンサートを行う上で大切なことは、どういふものを創るのかについて、先方とのミーティングを欠かさず行うことであり、「オーダーに応じていく力も皆さんの音楽力となる」と語った。</p> <p>さらに、クラウドファンディングという価値を共有するコミュニティが日本でも浸透してきたことが語られた。政府は間接助成という制度を作り、国民や企業が芸術家に寄付すると、税金を払ったと同じものと見做して税金を免除する仕組みが取り入れられている。</p> <p>ここで、アマチュア・オーケストラ、NPO法人の分布と活動内容を全国規模で比較した。九州と四国エリアはオーケストラが少ないため、かえって音楽の需要があることが統計により推測できる。演奏家と観客をつなぐNPOも増えてきている。それにより、色々なところに音楽を届けやすくなったのではないかと指摘がなされた。</p> <p>最後に、今できることは何かをテーマに、「人との出会いを大切に」「今できることを大切に」「常に自分の資質は変わるもの」「積極的に情報収集と行動を」「母校に誇りをもつ」という5つのポイントが語られた。受講生にとっては、音楽を通して社会と関わっていくことについて改めて考える機会となった。</p>

〈学生のことば〉

- ・自分以外のジャンルの人も関わり、色々なアイデアをもらい、音楽が多様化している時代についていける人になろうと思います。音楽を伝える力を得て、様々な場で人々と通じ合っていきたいです。また、自分の演奏スキル、コミュニケーション能力（分かちあう力）を上げていこうと思います。（神戸 / 声楽 / 3年）
- ・3枚の絵の価値について、人それぞれ何に価値を置くかが違うこと、また価値は他人が決めることを実感し、音楽に関しても説得力を持つことが必要だということを、自分が演奏する時に改めて考えていかなければと感じました。（神戸 / ピアノ / 3年）
- ・少子化・高齢化といったマイナスの社会現象を、音楽を演奏する人が少なくなって、相対的に聴く人が増えるなどといったプラスの方向に考えられるようになりたいです。（神戸 / 声楽 / 1年）
- ・公園の人通りの少ない所での演奏実験はとても興味深かったし、自分もチャレンジしてみたいと思いました。美術品の値段を考える話や、芸術・音楽の価値についての話は、今自分たちはお金をもらって活動していないため、あまり考えたことがなかったのですが、いつか自分が演奏してお金をもらう側になった時には絶対に考えないといけないことなので、「音楽に価値をつける」ことに対しての方法や答えを見つけていけたらと思いました。（神戸 / 声楽 / 3年）
- ・心理学や統計学を生かし、音楽の場に取り入れていくことは以前から興味があったので、話を聞いてよかったです。正直、現代においてクラシックに興味関心を持っている人が増えているということに驚きました。そういった意味でも自分で感じるだけでなく調査することの大切さがよくわかりました。聴く側が何を求めているかよく考える必要があると思いました。（東京 / ピアノ / 2年）
- ・音楽には認知学、心理学等様々な学問が密接に関わっていることに驚きました。音楽的な方面だけではなく、あらゆる方面の知識を貪欲に吸収することは音楽をより深く理解する上でプラスになるのだと思いました。従って、音楽で自己表現する方法も多様なのだと思いました。今回の講座で「芸術が存在する意義」を考えさせられました。はっきりとした答えを出すことはあまりに難しい問いですが、考えたことは、芸術活動を通じて各々に湧き出る感情や感動を共有し、同じ時間の中で過ごすことになるのではないかと思います。（東京 / ピアノ / 3年）
- ・音楽と社会の関わりはとても多様になっていて、聴衆のニーズが増えたし、それに対応する供給する側にも様々なスキルが必要とされていることに音楽の形の幅広さを感じました。どんな人でもその人の好きな音楽を見つけやすくなるし、皆がそれぞれの形で音楽に触れるというのはとてもよいと思いました。また、その活動に価値を見出し、そこから外へとつながり、コミュニケーションの場という別の目的にもなるという関連づけが大切だと思いました。（東京 / ピアノ / 1年）



※写真は神戸女学院大学での様子です。



平成 29 年度 第 5 回 「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 5 回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップと学習論」
講 師	荻宿 俊文 (青山学院大学社会情報学部教授)
実施日時	2017 年 7 月 14 日 (金) 14:10 ~ 15:30
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
講座の概要	<p>2000 年代になって教育の現場に取り入れられているワークショップについて、教育学の立場から理論的裏付けを解説し、現代日本の社会状況の中で何が教育に、そして大学生に求められているのかという包括的な議論が展開された。</p> <p>本講座で取り組んでいるインタラクティブ・コンサートや音楽ワークショップを行うことにどのような教育的・社会的背景と意義があるのか、多様な例とデータを駆使した解説は、学生にとって密度が濃く刺激的な内容であったと思われる。少子化にともなって子どもの学力や生きる力に陰りが見え始め、引きこもりや学習障害といった問題が山積する一方で、高齢化社会となって外国人労働者の受入れが増加し、日本は多様な考え方の人が共生する社会へと変わらざるを得ない状態にある。そのような中で教育に求められるのは知識ばかりでなく、多様な人の在り方を理解する多元的な価値観であり、そのベースとして各々が自分の意見をしっかりとつこと、自分らしさ (代替不可能性) が担保され、互いにリスペクトし合うことのできる関係を創り出せるコミュニケーション力やデザイン力の重要性が強調された。ワークショップでは多様な参加者の中で個々の個性を尊重しあいながら、協同で何かを作り上げる体験が得られる。その特徴をよく理解して、社会の中のさまざまなシーンでワークショップ的な取り組みをデザインできる人材が求められている。</p> <p>音楽教育においても、これまで「理解すること (= 譜面が読める)」「できること (= 難しい曲を演奏し、楽器を操れる能力がある)」に重点が置かれてきたが、「分かち合うこと (= 音楽をとおして共通体験をもち、心を合わせたり、相手を理解したりする機会をもつ)」の重要性がもっと意識されて然るべきである。そのことは、ワークショップと銘打ったイベントにおいてのみならず、音楽大学で行われる専門教育においても求められている。本講座を受講した学生たちが、そうした意識改革の旗手となっていくことに期待したい。</p>

〈学生のことば〉

・「答えはきみの中にある」という言葉が強く印象に残りました。必要なことは、皆が揃って正解を唱えるのではなく、一人一人が自分の価値観を育てることなのだと思います。ワークショップはそのことを参加者に気付かせる為にあると聞き、それ程の道徳的価値があるものだとは知りませんでした。ヘイトスピーチの映像を見て、他者同士のいがみ合い、自分が気に入らないと激しいやり方で排除しようとするのが現実に行われているのだと思いました。人同士がいがみ合い憎みあっても何も状況はよくなると思います。お互いを

受け入れ、認め合うことが出来れば一番理想的だと思います。先生がおっしゃった通り、音楽は人間の本能的な欲求を引き出す最も効果的なツールかもしれないと思います。(東京 / ピアノ / 3 年)

・ワークショップでは、正しい答えだけでなく、自分が納得した答えに意味があるという言葉が印象に残りました。ただ先生の言葉や、顔色をうかがって答えを出すのではなく、自分の中にある一人一人の意見が大切なのだと改めて気づきました。日本人が韓国人を追い出そうとしている映像をみましたが、自分と違う意見の人を避けて通るだけで

なく、どのように受け入れ、それにどう対処していくのか、難しいことだなと思いました。先生のお話がおもしろくて、なるほどと思うことがたくさんあって楽しかったです。

(東京/ピアノ/3年)

- ・私もアメリカ人の先生のレッスンを受けたときに「どうしてこう弾こうと思ったの?」と聞かれて答えられなかったことがあり、ワークショップも自分がリーダーになって何かを考えるのは苦手なので典型的な日本人だな、と思いました。今まで授業で行った音楽のワークショップと中学校で演劇部に入っていた時にやっていたワークショップの2種類しか知らなかったのですが、今、こんなにもたくさんのワークショップがあることを知りました。この授業にも知り合いはほとんどいなかったけれど、誕生月でグループ活動をしていくうちに、仲間意識が芽生えたなということ思い出しました。私も、「テレビもあまり見ないし、政治も知らないから」という理由で選挙に一度も行っていないので、多元的な価値観に縛られているのかなと思いました。(東京/ピアノ/2年)
- ・最近ワークショップと耳にすることが多かったが、体験会みたいなのかなと、ワークショップってなんだろうとふんわりとしていたものが、今回の講座でわかりました。一度行ってみたいと思いました。(東京/ピアノ/3年)
- ・「皆」ではなく「一人一人」を大切にすることがとても重要なのだと感じた。自分が幸せになるということは、周りのコミュニティも幸せを感じているから幸せになれるのだなと思った。自分一人が幸せであることはなかなか成立しない

のだとよくわかった。ワークショップは、参加者も自ら体験して楽しむことが醍醐味だと改めて実感した。

(東京/ピアノ/2年)

- ・「ワークショップ」とは何か、もやもやとしか理解していなかったのが、今日明確になりました。普通の授業とは違うものだというのは知っていましたが・・・ワークショップをきちんと活用できる人は、それによって自分の性格や知識も広がりそうだと思います。ワークショップは応用というか、1つ上のステップなのだと感じました。(東京/ピアノ/2年)
- ・昔から演劇のワークショップによく参加していた為、今回の講座は身近に感じつつも大変勉強になりました。好きな色は?という質問の流れから、答えは自分の中であって、自分の意見を持つということをすごく簡単に理解することができました。また「知識はより多くの人に分かってもらうためにある」という言葉が頭に残りました。自分が納得する答えに意味があり、代替不可能性の感覚を失わないということを大切にしたいと思います。ワークショップの分類表はすごく色々な種類があり、後日じっくり見てみたいです。自分の嫌いな人を避けて通らずに考えていくこと、出来事を知り考えていくこともしていきたいです。家で今日の講座で聞いた話をしてみようと思います。(神戸/声楽/3年)
- ・「表現の代替不可能性」という言葉を初めて聞きました。表現や思考・存在は代わりがきかない、という当たり前のことをしっかりと認識することができました。(神戸/声楽/1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。



平成 29 年度 第 6 回 「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 6 回ミュージック・コミュニケーション講座 「文化施設の新たな挑戦～三重県総合文化センターが取り組むアート教育」
講師	鈴木 智之（公益財団法人三重県文化振興事業団 三重県文化会館事業課 音楽事業係主事）
実施日時	2017 年 10 月 13 日（金） 14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第 6 回の講座は、三重県文化会館事業課音楽事業係主事の鈴木智之氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。鈴木氏は、昭和音楽大学在学中にこのミュージック・コミュニケーション講座（2014 年度まで昭和音楽大学も参加して 3 大学で行われていた）を受講し、その一環で「子どものためのスペシャル・コンサート～3 大学饗宴～」(2010 年 10 月 16 日)にも出演した経験をもつ大先輩である。</p> <p>講義はパワーポイントを使って、まず三重県がどういうところなのかという質問から始まった。関東では三重県の印象が薄いのか、東京音大ではあまり知られていないようだったが、伊勢神宮や鳥羽水族館、熊野古道などの名所があげられた。</p> <p>次に、文化施設・ホールの役割について学生に質問が投げかけられ、地域の人々が集って音楽や演劇を観るところなどの意見が出た。文化施設・ホールとは文化芸術の創造・交流・発信の拠点として国・地方公共団体・民間が設置している施設で、これらの文化施設においては、芸術家や芸術団体等による多様な文化芸術活動も行われているとの説明がなされた。</p> <p>次に、「むずかしい話かも知れませんが、ぜひ知っておいてほしい」と前置きして、「文化芸術振興基本法」（平成 29 年 6 月に「文化芸術基本法」と改正）と「劇場法」という 2 つの法律について説明された。これらは現在も改正されているという説明を受けて、制定にこれほど長い時間のかかるものかと学生たちは驚いていた。</p> <p>続いて三重県総合文化センターの事業内容についての説明が行われた。三重県文化会館では、拠点契約を結ぶ新日本フィルハーモニー管弦楽団の制作業務やワンコイン・コンサートの企画制作、ジュニア管弦楽団の運営、作曲家である加羽沢美濃氏と「初心者のためのクラシック音楽講座」の企画運営等をしている。また、2014 年より組織全体でアート教育事業に取り組み、子どもたちを対象に「キッズ・アート・フェスティバル M 祭！」や、アートや教育の関係者が音楽・演劇・美術・ダンスなどの分野のワークショップを通じて集い合う研修会「ミエ・アート・ラボ」を行ってきている。</p> <p>このような事業を通じて鈴木氏は、芸術家の心と耳をもつこと、地域社会や多分野に興味をもつこと、専門分野を活かすことが必要だと訴えた。最後に、文化施設職員が潤滑油となって、これからもっとアートと社会と人を結んでいきたいと締め括った。</p> <p>演奏活動だけでなく、卒業後はマネージメント関係や異分野の社会に進みたいと考えている学生たちにとっても、有意義な講座となった。</p>

〈学生のことば〉

・ 劇場やホールについてちゃんと考えたことがなかったのですが、おもしろかったです。劇場の定義など、気にもしたことがないことを皆で考えられて

楽しかったです。

(神戸 / 声楽 / 1 年)

・ 文化芸術振興基本法と劇場法はしっかり覚えめました。三重のことも、今回の授業でいろいろと知

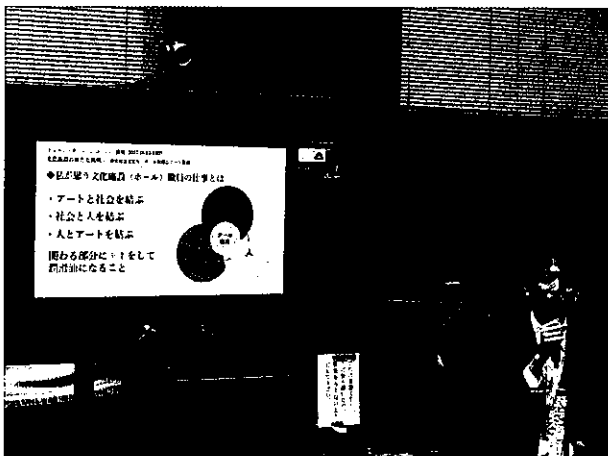
ることができましたが、音楽・芸術の専門学科がないというのは驚きました。だからこそ、アートで教育分野を豊かにするという理念で、文化施設が担うという姿勢がとてもよいと思います。センター内で絵を描くというイベントに興味をそそられました。一度、私も三重県総合文化センターに行ってみたいし、事業の見学などもしてみたいです。(神戸/声楽/3年)

・今日の講座で、まず公共施設の仕事を初めて知り、本当に沢山のことを考えて仕事をしているんだなと思いました。音楽のことだけでなく、その地域の特産物や有名な土地など、いろいろなことを知って、それが最終的に音楽に生きてくるのはすばらしいと思いました。(神戸/ピアノ/2年)

・三重県には芸術系の大学がないことから、こういう芸術センターで豊富なコンサートを開催することによって芸術を広めていく事業にすごく納得しました。ないからいいじゃなくて、ないからこそ大きくしていこうというのがすごくいいと思いました。(神戸/ピアノ/3年)

・文化芸術振興基本法や劇場法などの芸術に関する法律ができたのが最近で、驚いた。文化施設やホールは地域の人が集まるというイメージはあったが、その施設で働いている人々が、どんなことをしているかは知らなかった。想像とは違って、コンサートやイベントなどの企画などとても楽しそうで素敵な仕事だと思った。子どもたちが集まって芸術的なことをするのは心が豊かになると思う。(東京/声楽/1年)

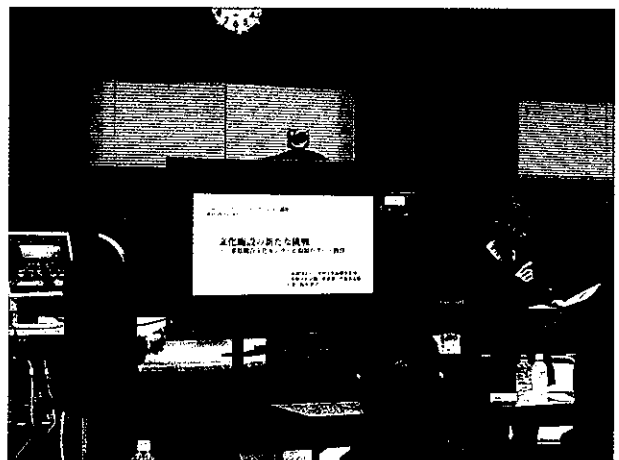
・当たり前にあった文化施設について、考えたこと



もなかったようなことがたくさんあってとても勉強になりました(法律があることなど)。ただ運営するだけでなく、まとめる力、企画力、人間力プラス音楽や人への愛がないと務まらないと改めて感じました。(東京/ピアノ/2年)

・文化芸術振興基本法と劇場法の存在には驚いた。三重県総合文化センターの稼働率と総人口に対する集客率の高さにはきっと理由があるに違いないという気持ちで聴講した。アート教育事業を始めたこと、文化芸術分野において、社会的責任を負っていることに改めて感心した。世界的音楽家を招くのに、片方では子どものワークショップもやる!というのがすばらしいと思いました。(東京/ピアノ/3年)

・演奏のみに集中するのではなく、あらゆるジャンルに目を向けることで、音楽以外の分野や、音楽であれば専門であるクラシック以外のジャンル、音楽そのものよりも幅広い視点でより主体的に考えたいと思いました。(東京/ピアノ/3年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成 29 年度 第 7 回 「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第 7 回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学 学生
実施日時	2017 年 12 月 1 日（金）14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>2017 年 10 月 10 日～14 日に神戸女学院大学で実施した音楽作りワークショップ特別研修（24～27 頁参照）について、本学の履修生が発表を行った。</p> <p>各日に行ったワークについて映像を用いて概要を報告し、4 日間の学びを振り返った。その際、アイスブレイクの手法や曲作りの過程、学生たちに割り当てられた役割やリーダーたちの指導の要点を簡潔に紹介した。最終日の「音で遊ぼう！子どものための音楽づくりワークショップ」については、子どもの反応や学生の感想、リーダーから受けたアドバイスを交えて紹介し、締め括りの作品発表の場面については、子どもの反応とリーダーの動きのそれぞれに焦点を当てた 2 種の映像で示した。</p> <p>発表後の質疑応答では、保護者アンケートの回答に関して、「保護者の感想をどこまで取り入れるのか？」という質問が東京音大の学生から出た。これに対して発表者は、「メインは音楽を作ることだが、小学生の子どもをワークショップに連れて来てくれる保護者に対する配慮も必要」と答えた。ワークショップでは優先順位を考えるのも大切であると再確認し、今後さらに充実したワークショップを行うにはどのようにしたらよいかを考える機会になった。</p>

〈学生のこぼ〉

・ワークショップの中に、これまで私が聴いてきた様々な音楽が含まれていて、すごくいいと思いました。オリヴィア先生のアフリカの音楽も、ジェームズ先生のリズムも、普段私たちがなかなか触れられないもので、私も一緒に参加したいと思いました。2 日目の〈エイサー〉や阿波踊りも、聴いているだけでワクワクし、特に「なべなべそこぬけ」は原曲と全く違う雰囲気曲になっていておもしろかったです。最終日の作品発表は、曲中で楽器や雰囲気がコロコロと変わっていき、曲は長いのに聴いていて全く飽きず、感動しました。子どもたちも真剣に一生懸命取り組んでいてよかったです。（神戸 / 声楽 / 3 年）

・私もまた機会があったらワークショップに参加したいです。「子どもたちが緊張していたら、役割を分担して緊張を解いてあげる」というのが印象に残っています。これは何事にも使えると思うので、実践していきたいです。（神戸 / ピアノ / 2 年）

・日本の歌やメロディーを使ったワークショップがとていいと思った。自国の歌やメロディーを用いて外国の人とワークショップをすれば、言葉が分からなくても相手の国を音楽を通じて理解することができていいと気がついた。子どもを対象としたワークショップでは、童謡を取り入れることで、子どもも馴染みやすく、楽しんで参加している印象を受けた。（東京 / ピアノ / 2 年）



※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成29年度 第8回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第8回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
発表者	東京音楽大学 学生
実施日時	2017年12月8日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	<p>東京音楽大学の今年度の実践から、7月に行ったワークショップと10月に開催した特別セミナーの内容について学生が報告をまとめ、発表した。</p> <p>ワークショップは7月25日に東京音楽大学に隣接する豊島区の施設「区民ひろば南池袋」で13時半～15時までの90分間、小学生を対象に実施したもの（20ページ参照）。リーダーをアシストした二人の学生はリーディングも初めてであったが、報告を行うことも初めてで、その準備のために当日の映像をチェックし、発表資料（配布用レジュメとパワーポイント）と発表原稿の作成に取り組んだ。パワーポイントと映像資料をうまく組み合わせることで効果的な発表をすることができた。ワークショップの正式タイトルと趣旨の説明が不十分であったため、今回のワークショップで何を目指し、なぜドビュッシーの音楽を素材として用いたのかという点について、神戸女学院から質問を受けた。</p> <p>10月6～9日の特別セミナー（21～23ページ参照）については、三人の学生が分担して4日間の活動内容を報告した。こちらも事前に記録映像をチェックした上で、各自が発表原稿とパワーポイントを作成し、4日間のバランスと内容的なつながりを考えて全体を調整した。こちらのグループの発表に対しては「きれいごとのように整いすぎている」という感想も聞かれたが、実は学生たちが作成したものに全く内容的な修正を加えていないままでの発表であり、自分たちの力でそこまで完成できたことを評価したい。</p> <p>今回の発表には1年から4年までの学生が関わり、「ワークショップを実践することから離れて、「自分たちのやっていることをわかりやすく報告し、その意義について語る」ことのトレーニングとなった。映像を交えての説明は効果的にできているが、わかりやすく語る点ではまだまだ改善の余地がある。今後の指導において留意していきたい。</p>

〈学生のことば〉

・初めて中継講座の中でパワーポイントを使ってプレゼンをしました。あのすばらしい講義をどのように説明すればうまく伝わるのか、言葉選びに悩みました。反省点としては、実際に行ったワークショップをプレゼン中に取り入れたり、ビデオを再生すればよかったという点です。以前に行ったプレゼンはとても堅苦しい内容だったので、プレゼンはこのようにするのが当たり前だと思っていました。プレゼン内容や相手に合わせて構成や話し方を変えていかなければならないと思いました。

（東京 / 音楽教育 / 1年）

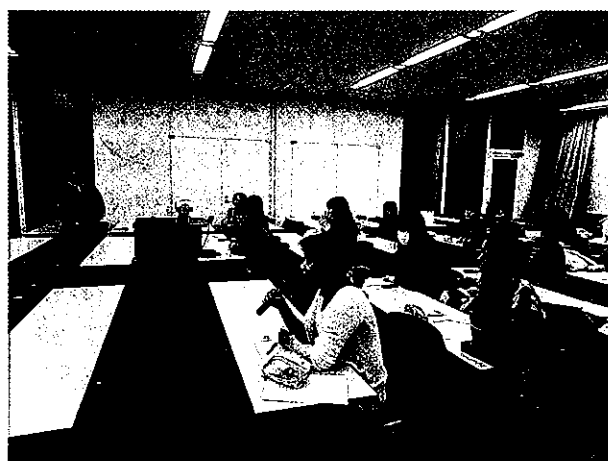
・南池袋のワークショップで子ども達が積極的に参加している様子を感じられてとてもいいなと思った。すこし内容が難しい子も、友達と協力をして、音楽やコミュニケーションなどいろいろな経験ができたのではないかなと思った。ジュームズとオリヴィアのワークショップでは普段やったことのないワークがたくさん行われていて、とても新鮮だった。人と人とのコミュニケーションにおいても、音楽的な要素においてもとても充実したワークショップだと思った。

（東京 / ピアノ / 2年）

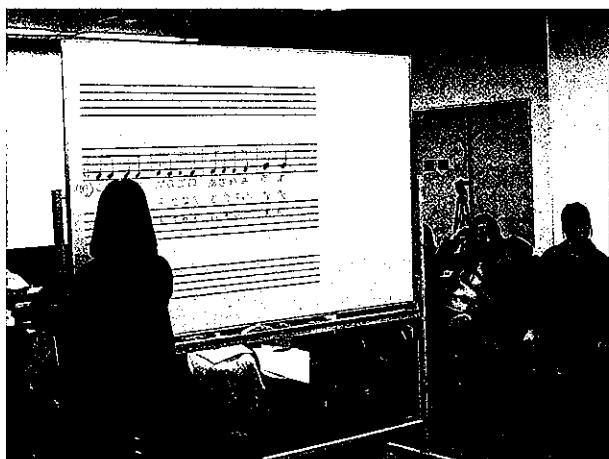
- ・自分たちのプレゼンテーションがこれからなので参考にしようと思った。子どもの豊かな発想は私たちの想像を超えているので、即興力は必要だなと思いました。わからない人に向けて説明しようとするが無意識に上から目線になってしまうのは仕方がないと思います。（東京 / ピアノ / 2年）
- ・もう少しどのような様子だったのか動画で見たかった。1つ1つのシーンごとに子どもたちの様子や感想、反省点を言っていてわかりやすくよかったと思った。成功してよかったと思った。特別講座の方は、日によってよい点がそれぞれあったが、どの日も説明が細かくわかりやすかった。動画が多くわかりやすかった。（東京 / 声楽 / 1年）
- ・アイスブレイクは重要なものなのだと思う。届けるゲーム、3秒ゲームなど今どきの子どもが興味をもってくれるのもおもしろく使えそうだった。子どもの集中力を持続させるのは難しいのによく頑張っていた。即興するセッションテーマを決め、完成させていくセッションでは2つ

のテーマをうまく融合できるようオリヴィアとジェームズがものすごく考えてくれたのだなあと感謝した。（東京 / ピアノ / 3年）

- ・7月のワークショップは、目的がはっきりとしていてよかったと思います。ワークショップ中、子ども達にドビュッシーの音楽と自然に触れ合わせていてよかったです。10月のワークショップは、途中までは神戸女学院と同じ流れでしたが、リズムゲームなどから内容が全く違っていき新鮮でした。テーマの「かぐや姫リターンズ」がすごくおもしろく、テーマに合わせて歌を歌ったり、絵本を読み聞かせしたりと、工夫されていてよかったです。子ども達の発想や意見もすてきな物が多く、映像を見ていてとても楽しかったです。（神戸 / 声楽 / 3年）
- ・保護者の方も参加するというのが、私には思いもつかないことだったので、とてもびっくりしました。参加人数が少ない場合はこういう方法もありだなと思いました。（神戸 / 声楽 / 1年）



※写真は東京音楽大学での様子です。



※写真は第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」東京音楽大学での様子です。

平成29年度 第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第9回ミュージック・コミュニケーション講座 「インタラクティブ・コンサートのアイデア発表 および 総括」
発表者	東京音楽大学 学生（アイデア発表）、津上智実・武石みどり（総括）
実施日時	2017年12月15日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	<p>東京音楽大学の授業内で取り組んでいるインタラクティブ・コンサートの企画発表の一部を中継授業で行い、神戸女学院の学生からも意見をもらった。具体的には、第1回講座で久保田先生から紹介があったティーチング・アーティストのような活動をする際に、コンサートでの演奏に入る前に参加者を行うワークとして、演奏楽曲の要素（エントリーポイント）を用いてどのようなことができるかという具体的アイデアの発表である。今回はディズニー音楽のコンサートを行うという前提の下に、Supercalifragilisticexpialidocious の旋律を用いて、参加者の小グループに4小節分の日本語の歌詞（替え歌）を考えさせ、それを組み合わせるというアイデアが出された。</p> <p>発表後の質疑応答で、ワークが単調なものにならないようにするために、リズム・モチーフを組み合わせる案、早口言葉のフレーズを組み合わせる案、反復句の部分に対比部分として用いる案が出された。実際のワークを考える企画力に加えて、ワークの方法を説明したりリードしたりする力がリーダーに求められていること、発表の中でワークの位置づけ（どういう場で何のためにそのワークをするのか）を明確にしなければ聞き手の理解が深まらないことを学ぶ機会となった。</p> <p>その後1年間の総括として、2大学間でディスカッションを行った。神戸女学院の津上先生からは、東京と神戸のワークショップをめぐる環境の地域差について指摘があった。東京音大側からは、本講座の指導内容が学部の1年間に留まるものではなく、大学院、ひいては卒業後の実践まで明確な展望を与えるものである必要があること、またそれを可能にするために学生の側でも柔軟な姿勢で積極的に実践に取り組み、卒業生や学外関係者との交流をさらに深めていく必要があることが指摘された。</p>

〈学生のこぼれ〉

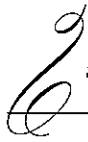
- ・ワークはとてもおもしろかったです。ワークショップリーダーとなるためには、色々なスキルが必要なのだと思います（ピアノ以外の楽器を演奏する能力、コミュニケーション能力、語学能力、歌唱力等）。同じ音楽を取り扱うにしても、アプローチによって受け手の印象も大きく変わるというお話を伺って、これは教員の授業にも言えることだと思います。（東京/ピアノ/3年）
- ・前半のワークショップは、企画者の狙い通り小学生に受けそうな企画だと思います。私自身はあ

れでよかったと思っていたのですが、「音楽性」という観点で先生や他の方の意見を聞きフィードバックしていくと、内容が更によくなっていったのがとてもよかったと思いました。

（神戸/声楽/3年）

- ・今日の替え歌で、東京音大の方たちが言っていた早口言葉をいれてみるバージョンをすぐやってみたいと思いました。東京と神戸で考えたものが一つの歌になっているのがワクワクして楽しかったです。（神戸/ピアノ/3年）

※講座の写真は左記18ページに掲載。



音楽ワークショップ 第7回みないけキッズアーティスト「ワンダーアンサンブル」

平成 29 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	第7回みないけキッズアーティスト「ワンダーアンサンブル」
実施日時	2017年7月25日(火) 13:30～15:00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	東京音楽大学 連携センター、区民ひろば南池袋
対象	豊島区在住・在学の小学生(参加者数 19名)

〈事業概要〉

夏休み中の小学生を対象に、ミュージック・コミュニケーション講座既習生を中心に、4月から新しく受講した学生をアシスタントとしてワークショップを創作・実践した。区民ひろばでのワークショップの取り組みも5年目になり、区民ひろば南池袋の夏休みイベントとして定着してきた。今回のワークショップではクラシックを題材にすること、楽器をなるべくたくさん使うことを念頭に、ワークショップを実施した。

■導入アイスブレイク

- ・体ほぐし
- ・リズムアンサンブル(コール&レスポンス)

初心者のリーダーが担当し、指示を出す際には緊張した様子であったが、参加者と向き合い、授業で学んだことを活かす最初の機会となった。

■伝言ゲーム

手に乗せた空想上の何かを言葉と動作で、ひとりひとりに回すゲーム。集中力を要するゲームで、自分の番を心待ちにして、子どもたちの緊張が高まった。

■歌・海の音のイメージ

まず、ドビュッシー「小舟にて」(小組曲)の冒頭のモチーフを用いて、歌を創作し、加えて手の振り付けをした。全員で歌えるようになったのちに、目をつぶり、各自で海の音をイメージした後で、再び目を開けてモチーフを歌うと、音楽の感じ方に変化が起き、歌声が豊かになった。

■テーマの共有

次に、ドビュッシーの「行列」(小組曲)のモチーフを全員で演奏することのできる形にアレンジして共有した。下行形になっている伴奏形の音に合わせて、ドビュッシーの名前をD・E・B・U・S・S・Y Yeah!という掛け声にして付け、元気よく一体感のあるモチーフに仕上げた。

■創作活動

全体を三つのチームに分け、二つのチームは「行列」のモチーフによるテーマを用いて創作を行い、もう一つのチームは「行列」の後半部分にあたる緩やかな音楽から音をいくつか素材として選び、それを基にトーンチャイムで創作活動を行った。初めて小学生との共同作業を体験した学生たちは、どのように接したらよいか戸惑いながらも、限りある時間の中で創作をまとめるのに必死であった。複数回ワークショップに参加したことのある学生は経験を存分に活かし、落ち着いて子どもたちと接していた。ワークショップリーダーは、実践を通して育つことを実感し、定期的に体験の場をもつことの重要性が再認識された。

■合奏

創作のまとめとして、各チームの音楽を発表し合った後に、「行列」のテーマと創作した音楽を即興的に組み合わせ一つ作品とした。子どもたちもリーダーもどこで何をどう奏するのか、お互いに聴き合いながら創造する緊張感あふれるひと時を共有できた。



ワークショップの様子

東京音楽大学「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに 「おんがくづくりワークショップ～ イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう～」

平成 29 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	音楽ワークショップ特別セミナー
講師	ジェームズ・アダムス、オリヴィア・ブラッドベリー
実施日時・期間	2017年10月6日(金)～9日(月祝)
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
参加費	東京音楽大学生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生は無料 一般の参加者(上記以外) 5000円/9日ワークショップ参加:無料
主催・協力など	主催:東京音楽大学 協力:英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、神戸女学院大学
参加者数	東京音楽大学学生:10名 一般参加者:11名 最終日:ワークショップ参加者:子ども3名 保護者2名

〈事業概要〉

ギルドホール音楽演劇学校にあるリーダーシップコースを修了し、ワークショップ分野で活躍しているジェームズ・アダムス(マルチプレイヤー・作曲家)オリヴィア・ブラッドベリー(歌手・作曲家・シアターメイカー)を講師に迎え、4日間に渡って講座を行い、最終日にその実践として子どもと保護者を迎えてワークショップを行った。音楽ワークショップの基礎的な手法に加えて、講師陣の専門性を活かした手法を学ぶ、音楽的に豊かな内容となった。

1日目:通常授業時間における導入

身体と心を解きほぐすための身体的なアイスブレイクに始まり、教室の空間を使ったゲームや声を用いた即興演奏を行った。東京音楽大学では毎週の授業でワークショップを学んでいるため、学



生たちは最初から積極的に参加できた。後半は、拍手の上手な鳴らし方や、三拍子のアクセントの位置が変わることによって生まれるリズムアンサンブルに取り組んだ。シンプルな素材でも、少しの工夫で音楽的に充実度の高い作品を組み上げられるよい例であった。また、夜のセッション以降の特別講座に参加できない学生も、授業内で参加することにより、彼らの指導内容の一端を知ることができた。

1日目:(夜)

クリエイティブな発想を生むための身体ほぐしに始まり、拍子を用いたリズムを順番に回すゲームや全身を使って言葉を表現するワークを行った。後半では主に声を用いたワークに取り組み、参加者がそれぞれ Riff(短いパターンの反復)を考え順番に重ねる音楽を創作した。いわばループステーション(多重録音再生機)と同じことを複数の人間で創り出す作業である。音と音の間に新しいアイデアを重ねていく取り組みは、ワークショップリーダーとして、よりよい音楽を構成していくためのトレーニングにも繋がる。最後に一日の活動を細かく振り返り、ワークの意図や意味を確認した上で、子どもを迎えての最終日のワークショップに向けて、自分が分担するアイスブレイクのパートを考える宿題が課せられた。

2日目:

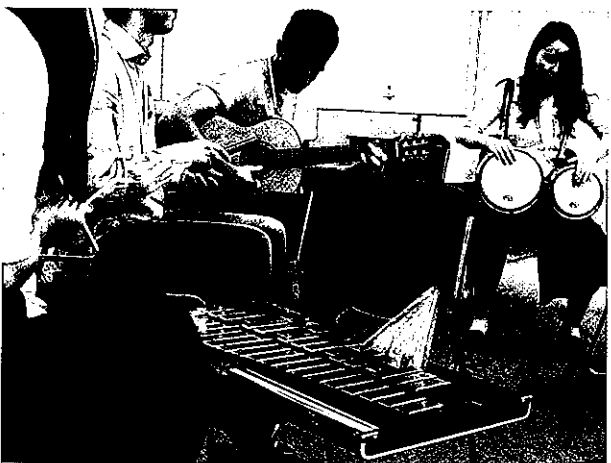
導入のアイスブレイクは1日目よりもアクティ

ブな内容になり、声を使ったワークでは呼吸や発声の要素を取り入れたワークなど、遊びながら専門的な側面に触れることができた。オリヴィアが提案した歌のワークは、彼女の専攻であるジャズヴォーカルの魅力が生かされた音楽で、ワークショップリーダーに必要とされる歌唱力に皆惹きつけられた。

1日目に課せられた宿題をもとにグループに分かれてディスカッションを行い、参加者が実際に子どもの役になって、考案してきたアイスブレイクのデモンストレーションを行った。考えてきたワークを実際にやってみると、緊張のために伝えたいことが思うように伝わらなかったり、想定外の反応を呼んだりすることに驚かされる。何をやってほしいかを子どもたちに明確に伝えること、また対象者の年齢やその日のテンションによってその場で柔軟に対応していくことが講師の側から強調された。午後には楽器を用いて、自然発生的な即興、各自の呼吸の長さによって音を変えるタイミングを取る方法など、様々な即興演奏の方法を学んだ。

3日目：

簡単なウォームアップに始まり、子どもを迎えるワークショップを実際にどのような構成で実施するかを学んだ。また、参加者にやりたいこと



をどのように確実に伝えられるか、という2日目に提示された課題に取り組むために、各自既存の歌を参加者に向けてプレゼンテーションし、旋律を教えることを体験した。参加者に明確な指示を出すことも大切であるが、どのくらいの長さのフレーズを、どのくらい繰り返して教えるかは、対象者によって異なるため、コツをつかむには経験を積む必要があると感じられた。

4日目：子どもを迎えるワークショップ

「おながづくりワークショップ～イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおながをつくらう～」

最終日は数組の親子を迎えて、2日目、3日目に考えたアイデアを基にワークショップを行った。学生たちは、それぞれウォームアップ、音楽を用いたゲーム、音楽創作の3つのチームに分かれて、それぞれの部分のリーダーを務め、オリヴィアが全体の進行役となった。初めてリードする参加者は緊張しながらも、身振り手振りを使って積極的にコミュニケーションを取る姿が見られた。音楽創作の場面では“もしもかぐや姫が地球に帰ってきたら”とテーマを設定し、創作を行った。子どもからストーリーのアイデアを引き出し、ストーリーを基に音楽を構築していくスキルは全体をリードするのとはまた違ったスキルであり、良質な質問を投げかけること、アイデアを活かしつつ破綻しないように全体をまとめることが求められる。限られた時間の中で、最終的にでき上がった作品がどんな音楽であるかにかかわらず、さまざまなアイデアを打ち解けた雰囲気の中でひとつの作品にまとめあげたジェームズとオリヴィアの発想力と柔軟な対応力は、学生達にとってよい手本となった。

ワークショップ後の振り返りでは、ワークショップの経験者とこれから始めたいと思っている人など、多様なバックグラウンドがある中で、日本のワークショップ事情や卒業後の活動方法などについて議論が展開された。ここ数年東京では急速にワークショップが広がりつつあり、学生の活躍できる場所も増えている。音楽を職業にすることを考える際、単に演奏するばかりではなく、音楽を使った多様な仕事の場をさまざまな立場から創出する可能性についての示唆を得て、学生たちにとって刺激的なエンディングとなった。

参加者の感想

- ・ 英語が分からなくても講師の表情や行動を見ていると伝わったので、リーダーはみんなが分かるように工夫すべきだと思った。(ピアノ / 2年)
- ・ 強弱の変化、リズムの変化、ハーモニーなど元の曲を変化させてよりその曲を楽しむ方法を学べたと思います。これからのMC講座の授業でも生かしていきたいと思いました。(音楽教育 / 1年)
- ・ 人前でパフォーマンスするときの度胸が少しついたと思います。(ピアノ / 3年)
- ・ その人個人(パーソナリティー)がすごく出る、出さなければ参加できないと感じた。ソフトだけど強く!
- ・ 人の考えをいかに展開させ、その時の方向性を

適切につかむか、そういう能力と臨機応変さが大切だと思う。(一般参加者)

- ・ 音楽的な要素とは何かを考えさせられる時間でした。音楽の力、様々なところで行われている色々なワークショップのねらい、どのように活用していくのか。肩の力がぬけたような感覚でした。(一般参加者)
- ・ 細かい指導でとてもよかったです。アイデアそして想像性が(子どもも大人も)すばしかったです。たくさんありすぎて感激です。(一般参加者)
- ・ まず、教わった基本をひとつひとつ身につけたいです。自分のアイデアはそのあとで。創作の中で生まれてくるものに任せること。それをサポートできるようにしたい。(一般参加者)



ワークショップの様子

「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 8 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成 29 年度 実習報告 (神戸女学院大学)

事業名称	「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 8 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導者	オリヴィア・ブラッドベリー、ジェームズ・アダムス、東 瑛子 (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生)
企画・司会	津上 智実 (神戸女学院大学音楽学部教授)
実施日時・期間	2017 年 10 月 10 日 (火) 18:20 ~ 19:50 10 月 11 日 (水) 10:00 ~ 17:00 10 月 13 日 (金) 17:15 ~ 19:00 10 月 14 日 (土) 9:30 ~ 18:00 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	神戸女学院大学音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生 (卒業生含む) は無料 一般の参加者 (上記以外) : 全日参加 : 5,000 円 14 日子ども参加 : 無料
主催・協力など	主催 : 神戸女学院大学音楽学部 協力 : 英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	10 月 10、11、13 日 神戸女学院生 10 名 (1 年生 3 名、2 年生 2 名、3 年生 4 名、院生 1 名) 卒業生 2 名 10 月 14 日 神戸女学院生 11 名 (1 年生 3 名、2 年生 2 名、3 年生 5 名、院生 1 名) 卒業生 1 名 子ども 20 名 (小 1 年生 3 名、小 2 年生 6 名 (2 名)、小 3 年生 2 名、 小 4 年生 4 名、小 5 年生 2 名 (1 名)) * () は男の子 教員・スタッフ 5 名、逐次通訳 7 名 (院生 7 名)

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通し、誰もが持っているクリエイティブなアイデアや能力を引き出し、またコミュニケーション能力やリーダーシップなど、これから社会に飛び立つ学生にとって必要な力を実践的に身につけることである。

そのため、2017 年度 10 月 10 日からの 4 日間、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースの修了生であり、世界で活躍する若手の音楽家であるオリヴィア・ブラッドベリー (歌手、作曲家、シアター・メイカー)、ジェームズ・アダムス (マルチ・プレイヤー、作曲家) の 2 名を日本に招聘

し、また同修了生で本学卒業生の東瑛子 (ヴァイオリン) を講師として迎え、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ (Creative Music Workshop) 特別研修を実施した。

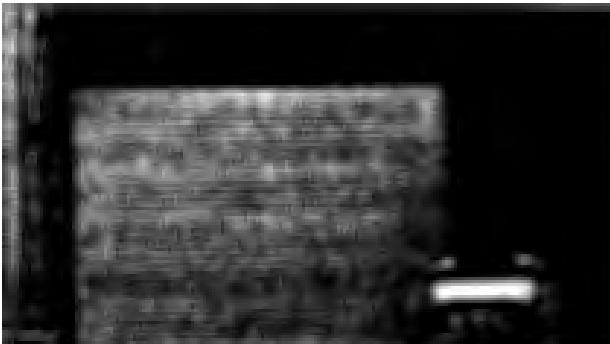
10 月 10 日、11 日、13 日の 3 日間は学生対象の研修を計 5 コマ、最終日の 10 月 14 日には学生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第 8 回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した (後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施)。4 日間のワークショップ研修では、身体をほぐした

り、手拍子や息の音を隣の人に回したりするアイス・ブレイクを行い、また受講生自身がリーディングする機会が多く作られ、自己表現や他者と協力し合う力が養われていった。

1日目は、まずアイスブレイクとして声を出しながら身体をほぐした後、自分の名前と好きな言葉を音楽のように扱いながら声で表現した。その中で出てきた「静寂」という言葉を使ってセッションを行い、受講生は小さなキーワードで音楽を作れるのだということを学んだ。

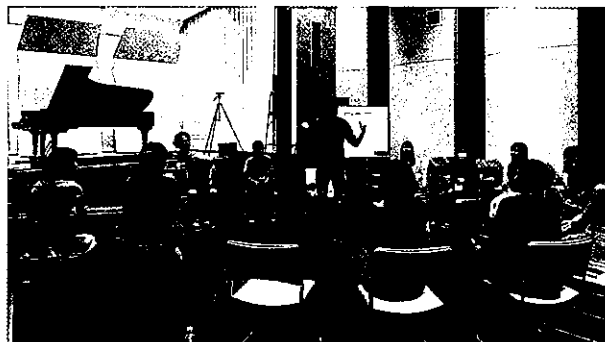


次に、オリヴィアがカメルーンの歌を題材にワークを行った。受講生たちは、1つのハーモニーに色々なヴァリエーションをつけていくことで、シンプルな始まりでも、音楽を変化させていけると実感したようだった。また、ジェームズはアルゼンチンのカンドウメンというリズムを紹介した。ラテン音楽の基本である「クラベ」のリズムをとった後、グループに分かれて音楽を作り、それらを組み合わせると全員で1つの作品を作った。



2日目は、前日の宿題の発表として、受講生がワークショップに使えるような音楽として「エイサー」「鍋鍋底抜け」「阿波踊り」「どんぐりころころ」を提案し、それらを用いてリーディングのやり方を学んだ。リズムを強調したり、歌のヴァリエーションを作るなど、一つのアイデアを拡大させながら、受講生がリードしていった。リーディングの大切なポイントとして、柔軟性を持つこと、何を足して何を省いたらいいかを計算すること、分かりやすいサインを出すことなどが語られた。ま

た、リーダーを2人にするによりサポートし合えると講師がアドバイスし、さらによりリーディングになるように練習を重ねた。受講生がリーディングをやってみてどう感じたか、講師と意見交換も行い、振り返る時間も持たれた。



その後、子どもたちがより創造的な時間を過ごすための準備について考えた。まず、ウォーミングアップによりリラックスできる環境を作ること念頭に置き、子どもの表現によって性格を知り、その場の参加者のキャラクターに応じてウォーミングアップを変えていく必要があると指摘された。子どもと一緒にアイスブレイクを行っている場を想像しながら、「エイサー」を用いたワークと、名前を順番に言っていくワークを行った。子どもの声が小さくてもはっきりと聞き取れるように、妨げにならない動作にすることや、自分がどう表現したいのかはっきり伝えることが大切だとアドバイスがあった。そして、今までやったリズムや曲を素材として挙げていき、どの素材を組み合わせるか、ワークショップの流れとグループ分け、誰をリーダーとするかを検討した。さらに、最終日には「秋」をテーマとして音楽作りをすることに決定し、自然・祭・収穫の3グループに分かれ、最後は1つの大きな作品にすることとした。

3日目は「秋」をテーマにしたセッションを試みた。受講生が自発的にリードする姿も多く見られ、積極性が感じられた。まず、ピアノ・歌・打楽器のグループに分かれて、素材をどのように発展させていくのか試みながら色々なアイデアを試した。

また、翌日に向けた準備として、グループワークの進め方について相談した。ウォーミングアップの練習では、子どもがよりよく理解できるように説明もつけながらリーディングを行い、練習した。お互いが助け合うことを意識しようと呼びかけ、翌日に備えた。

最終日の10月14日には、小学校1年生から5

年生までの子ども20名を迎えて、第8回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」が開催された。子どもたちは、各自持参したヴァイオリンやピアノなどの楽器や、本学で用意した小物打楽器などを持ち、音楽作りに参加した。まずは、受講生が準備してきたウォーミングアップから始まった。「エイサー」やボールを想像して相手に渡すゲームでは、受講生たちはリーダーの意図を汲みながら子どもたちが理解できるようにフォローしていた。名前を1人ずつ言っていくワークでは、子どもたちはまだまだ緊張しているようだった。



アイスブレイクの後は、「秋」をテーマにして音楽作りすることを呼びかけた。受講生がリードしながら「もみじ」「どんぐり」「秋」を歌い、リズムを担当するリーダーがボディ・クラッピングを教えた。次に、リーダーを2人にして、2つグループを作り、違ったハーモニーを合わせた。また、それぞれの歌を示すサインを全員で共有した。次に、1人ずつ好きな楽器を選び、ワークを行った。リーダーがサインを出しながら、小さな音・大きな音にする指示を出して、全員で揃える感覚をつかんでいった。また、上述の秋の歌にボディ・クラッピングを合わせて、色々な表現を段階的に取り入れていった。

次に、3つのグループに分かれて音楽作りを行った。ピアノやヴァイオリンのグループでは「秋の収穫」をテーマとして曲作りを行った。「どんぐりころころ」のフレーズにヴァイオリンの音を重ね、子どものアイデアを取り入れながら、アレンジしていった。鍵盤ハーモニカやトーンチャイムのグループでは「秋の自然」をテーマとし、旋律に7文字の歌詞をいくつも組み合わせる曲作りを行った。また、「秋の朝」を表現した部分も加えることとなり、朝の明るさを高い音程で表現するなど、子どもからの発案が多く見られた。木魚やカスタネット等の様々な打楽器のグループでは「秋のお

祭り」をテーマとし、違う旋律を組み合わせる曲を作ったり、歌うだけでなく囁く部分も作ったりするなどの工夫をしていった。

一度全員が集まり、それぞれのグループの音楽を聴き合ったところ、グループごとに個性のある音楽が見られ、子どもたちもリーダーの指示をよく見ていた。

お昼休憩の後、三角マークは「もみじ」を表すことなどを覚えているか確認しながら全員で歌った。また、3つの音楽を組み合わせる際、まとまりが感じられず、1つの作品としてどのように繋げばいいのかという課題が出てきた。オリヴィアから、「カキ氷」の言葉を他のグループの人がささやき、自然に次のグループにもっていくという提案があり、作品が次第に一体感を増していった。最終音を全員で揃えることが難しかったが、何度も練習し、作品を仕上げた。

ワークショップの締めくくりとして、保護者が観客席で見守る中、作品発表が行われた。演奏の前に、どのようなテーマなのかを受講生から紹介した後、途切れることなく演奏していった。リーダーの指示が的確に伝わるように受講生は子どもに寄り添って演奏し、子どもたちも集中力を持って参加していた。作品発表の後、保護者も交えて歌のセッションが行われ、盛り上がりを見せた。

最後に、今日のワークショップについて受講生と子どもたちでディスカッションを行った。3つのグループに分かれ、楽しかったことや反省点を紙に書き出しながら1日を振り返った。「違う楽器同士でアドヴァイスを出し合った」「音を探ることが難しかった」等、様々な意見が上がり、音楽作りに積極的に取り組んでいた様子が改めて分かった。

子どもたちが帰った後、受講生と講師陣で最終日と研修会全体についての反省会を行い、一人ずつ感想を発表した。初めて参加した受講生からは、音楽が何もないところから生まれることへの驚きが語られ、グループごとの作業の様子なども共有された。最後には全員でフォーク・ソングを歌い、温かい雰囲気の中でワークショップが締めくくられた。

なお、最終日には本学大学院通訳コースの院生7名が交代で逐次通訳を行い、相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。



〈参加者の声〉

- ・ 去年のワークショップに魅入られてこの世界が大好きになりました。今年、自分なりに経験を積んで臨んだのですが、やっぱり自信はなかったです。当日アイス・ブレイクがうまくいかなかったとき、本当にどうしようかと頭が真っ白になりました。感動だけで終わった去年と違い、沢山の課題が見えた今年でしたが、やはり 20 分程度の曲が 1 日で出来て、誰も楽譜を見ずに完成する光景は言葉にし難い感動があるので、ワークショップはすばらしいと思います。 (ピアノ / 3年)
- ・ 私は今回、初めて音楽作りワークショップに参加したためか、毎日が初めてのことばかりで、驚くことが多かったように思います。何もない所から音楽を作り出すことは本当に難しく、悩むこともありましたが、講師の方々や参加した人と一緒に新たな音楽を作り出すことは、本当に楽しかったです。また機会があれば参加したいです。 (声楽 / 3年)
- ・ 音楽を作る際の考え方だけでなく、リーダーとして大切なことなど、今まであまりフォーカスしてこなかった点について教えていただき、驚きの発見と貴重な経験と実りのある時間 (おもいで) を得られた、とてもよい研修でした。 (その他 / 2年)
- ・ 今後、音楽をする時には、常にクリエイティブな考え方を意識して、自由に表現することを意識していきたい。また、リーダーをする際は以前のように慌てず、リーダーとしてすべきことを事前に考えて準備し、落ち着いて役割を果たしたい。 (その他 / 2年)
- ・ 自分の意見をしっかり伝えることが本当に難しいということがわかりました。また、子どもたちの意見を聞きだして音楽にするとき、もっと子ども
- の目線で接することができればよくなるのではないかと思います。 (声楽 / 3年)
- ・ 今回で音楽作りワークショップへの参加は 3 回目でした。前回の時よりも積極的に参加することができたように思います。私より上の学年のベテランの人がいなかったのも、初めて参加した人をひっぱり出す立場になり、不安なこともありましたが、上手く行ってよかったです。音楽を何も無いところから作り出すおもしろさ、言葉がなくても音楽ができあがっていく楽しさを再び実感できました。 (ピアノ / 3年)
- ・ 今回の講座で、無から作り上げていく音楽のおもしろさ、また生まれてきた音楽を細部まで熟考し、音楽を聴いた時に最も気持ちよい形に仕上げているプロセスを 3 回のワークショップの中で一番感じることができました。この学んだことを生かして、今後、私自身のソロ曲はもちろん、伴奏、アンサンブル等で、他の人と音を重ねた時、最も気持ちよい音楽を探そうと思います。 (ピアノ / 3年)
- ・ 作曲を将来的にしていきたいと考えている私にとって、楽譜がなくてもコミュニケーションでこんなにステキな曲が作れるのだということと、クラシックしか知らなかった脳の中にジャズを学んだことは新たな発見で新鮮でした。今後も自分の作る曲に活かしたいです。いつか子どもに教えたいと思った時、このワークショップで身につけたものを使っていきたいと思います。 (ミュージック・クリエイション / 1年)
- ・ 映画音楽のようですばらしかったです。たった 1 日でどんな作品になるか? と思っていましたが、よい意味で裏切られました! (保護者)
- ・ 異年齢の子どもたちで何かを創り上げるという体験は、学校ではなかなか機会がないので、このようなワークショップは今後も開いてほしいです。 (保護者)
- ・ 初めて参加しましたが、ただ聴いたり教えてもらったりするだけではなく、参加型のこのようなおもしろい企画があるなんてびっくりしました。まだ低学年なのでどうかなあ、と心配でしたが、ちゃんと集中して参加できたのでよかったです。 (保護者)

おわりに

音楽の力を伝えることのできる学生を社会に送り出すべく、今年度も2大学を結ぶ中継授業を軸として、さまざまな試みを行いました。2009（平成21年）に3大学連携としてスタートした共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション、音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」が、2015（平成27）年度に東京音楽大学と神戸女学院大学音楽学部との2大学連携となってから、さらに3年の歩みを積み重ねてきました。その間に、この取組の成果が少しずつ形になってきたのは喜ばしいことです。

昨年度の報告書の「おわりに」で、「ワークショップやインタラクティブ・コンサートの実践と同時に、それについているいるな人と語り合う力を養い、協働の場を広げていけるように、今後も努力していきたい」と武石みどり教授が述べていますが、まさにその方向でこの1年の実践が積み上げられてきました。本書は、それぞれの実践とそこでの学びについて報告するものです。

この取組の実施は、学内外の多くの皆様からさまざまなご支援を頂いて可能となりました。皆様方のお力添えに心より感謝申し上げますと共に、今後ともご協力ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

なお、神戸女学院大学音楽学部の連携ルームでは、メイン・スタッフの永吉りう子が今年度末に任期満了で退職します。これまでの6年間、綿密な仕事でこの活動を支えてくれたことを特に記して感謝します。

2018（平成30）年3月

津上智実（神戸女学院大学音楽学部 教授）

共同プロジェクト
音大連携による教育イノベーション～音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成29年度 活動報告書

平成30年3月 発行

発行者 東京音楽大学 連携センター
〒171-8540 東京都豊島区南池袋3-4-5
Tel:03-3982-3513 Fax:03-3982-3227

編集 神戸女学院大学音楽学部 連携ルーム
東京音楽大学 連携センター

